

ピアノ演奏における運指法についての基本概論

An introduction to fingering on piano performance

武 内 俊 之

Toshiyuki TAKEUCHI

音楽教育講座

(平成25年9月30日受理)

はじめに

ピアノ演奏において、運指法の基本を身に付けることは非常に重要である。もちろん手・指や身体的な条件には個人差も大きく、一人一人が自身にとって最も適した運指を考案していかなければならない場面は多々あるものの、しかし様々な作曲家の数多くの楽曲が前提としている、一定の基本的な考え方が存在する。様々な理由で独自の運指法を採用する場合にしても、音楽表現と密接に結び付いたそれを理解した上で対応することが肝要である。

本稿では、いわゆる西洋クラシック音楽の運指法基礎について代表的テクニック・カテゴリーに分けて整理しつつ、概説することとする。

1. 前提として

人間の手には当然のことながら5本の指があり、親指・人差し指・中指・薬指・小指のことをそれぞれ、ピアノ（鍵盤楽器）運指法においては1・2・3・4・5の番号で表す。

そして、この5本しかない指を、膨大な音符に、(音楽的な意味でもテクニク的な意味でも)いかに無駄なく合理的に弾きやすく配置するかというのが、運指法の核心である。

1. 1. 親指について

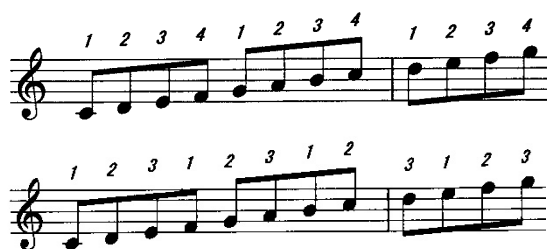
5本の指でたくさんの音を弾くというのは、非常に単純に言えば右手でド・レ・ミ・ファ・ソを1・2・3・4・5と弾いた時にはラの音をどうするかということであり、言い換えると「どの

ように指から指へと接続していくのか」という問題である。

その際に極めて重要なポイントとなるのが、親指の使い方である。上記の例で言えば、ラの音を例えば5で、つまりド・レ・ミ・ファ・ソ・ラを1・2・3・4・5・5と「弾くことはできる」が、これでは音をつなげることができないし速いスピードで弾くことも困難で、極めてぎこちない弾き方になってしまう。そこで、親指の太く短い他の指と異なる特異な形状に着目して、親指を他の指（ほとんどの場合は2, 3または4）にくぐらせる、あるいは親指を他の指（やはりほとんどの場合は2, 3または4）がまたぐ（注1）という運指が考案されることになった。これによって、例えば1・2・3・4 — 1・2・3・4 — 1・2・3・4 ... あるいは1・2・3 — 1・2・3 — 1・2・3 ... のように、どこまでも「接続」していくことができるようになる（譜例）。運指法において、親指はいわば支点の役割を果たすわけである。



注1



譜例

1. 2. 黒鍵

ピアノには白鍵と黒鍵が存在するが、黒鍵はより高く奥まった位置に置かれ、鍵盤の幅も狭くなっている。

この特徴から、単旋律のメロディや単音のパッセージを奏する時には、黒鍵を弾くのは2・3・4の指を中心とし、特に親指では前後の関係でやむを得ないケースを除き基本的に弾かないようにする。例えば以下のようなパッセージがあった時、下段よりも上段の運指の方が指を動かしやすいし音色もコントロールしやすい（右手で弾く場合）。



小指も短く細いため、あまり黒鍵には適していない。



これは左手のケースだがやはり上段の方が安定感が出る。

1. 3. 同音連打

連打のパッセージを弾く際には、同じ指で弾かず、以下のように指を順番に変えていくのを原則とする。手の自然な動きであり、また音楽的表情を表しやすいからである。



以下のような2音の連打であっても、下段より上段の運指の方がはるかに良い。



ただし、和音やオクターブ等の連打においては、指を変えることが不可能なケースがほとんどのため、同じ指で演奏することはやむを得ない。

2. 音階における運指法

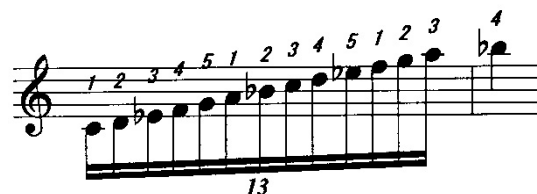
2. 1. 長音階と短音階

今日日常的に演奏や練習される音楽のほとんど大半は、いわゆる調性音楽だと言っていいであろう。従って、調性音楽の構成音を形成する長・短音階の運指をマスターすることの重要性は、強調してもし過ぎることはないと思われる。

前述した親指を支点とする奏法、また黒鍵を親指また小指で扱わないとの原則により、24の調性それぞれで、定まった運指が確立している。各種のピアノ教則本等に掲げられている24の長・短音階の運指を、繰り返し弾いて手に覚えさせて欲しい。

長・短音階が、実際の楽曲の中で、そのままの形で出て来ることもあるし、部分的だったり他のカテゴリーのテクニックと組み合わせられて現れることもあるが、そうやって身に付けた各調の運指を応用すれば良いのである。

例外的なケースとして、近代以降の作品等では、極めて速いパッセージを演奏するため、「5」の指の下に親指をくぐらせる1・2・3・4・5—1・2・3・4・5…（あるいは親指を「5」の指が飛び越える5・4・3・2・1—5・4・3・2・1…）と言った運指を用いることがある。



親指は接続性や安定性に優れるものの、反面敏捷性には難があり、音階の通常の運指（親指をくぐらせる回数が多くなる）では、時間がかかり急速なパッセージに間に合わなくなってしまうからである。

2. 2. 半音階

オクターブ内の12の全ての音を順番に並べた音階を半音階と言うが、半音階のための運指技術も重要である。

半音階の場合、長・短音階のようにいつも決まったパターンでというのではなく、上述の親指の特性から、そのパッセージの演奏目的に応じて運指を変化させるのが大切である。

あまり速くなくまたマルカート的な音色が求められるパッセージであれば、以下のような運指が一般的である。



(注 音符の上方は右手の、下方は左手の運指
これより後の譜例においても同様)

逆に、素早く動く、あるいはレガートが必要なパッセージであればあるほど、以下の運指を使うのが良い。



これは別の言い方をすれば4の指を使用する運指である。

この両者を使い分けられるようになれば、さまざまな作品がはるかに弾きやすくなるであろう。

2. 3. 5指や4指からのまたぎ

少々特殊な弾き方ではあるが、右手の上行形、左手の下行形のパッセージの際に、小指や薬指を中指や薬指が飛び越える（またぐ）運指が存在する。以下のようなものである。



これはもちろん親指をくぐらせる通常の運指でも対応できるのだが、親指をくぐらせる運指は1. 1. で述べた通りその後長く音符を接続して行くことを第一の目的にしているため、このパッセージのようにその後1音か2音しか続かないようなケースでは、5指や4指からのまたぎの方が弾きやすい（より小さなエネルギーで弾ける、ミスしにくい、音色を揃えやすい等）こともしばしばある。

特に、白鍵から黒鍵へとまたぐことは容易である。

3. アルペジオにおける運指法

3. 1. アルペジオの基本形

2. 1. で述べた同じ理由から、24調のアルペジオ基本形の運指を身に付けることも重要である。



例 ハ長調のアルペジオ基本形

ただアルペジオの場合、和音の種類は長3和音と短3和音だけではなく、一つの調性の中で属7和音・減7和音・増3和音等他にもいくつか考えられよく使用されるため、それらのアルペジオの運指も頭に入れておかなければならない。

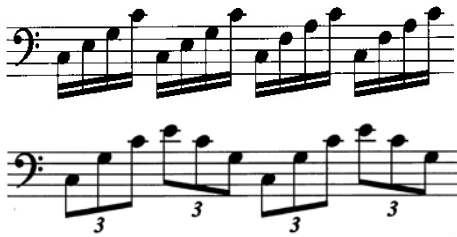


例 変イ音上のいくつかの種類のアルペジオ

いずれの種類のアルペジオでも、親指を支点とする、また黒鍵を親指また小指で扱わないとの運指原則は音階の場合と同様であり、また、1オクターブ内で親指を使用するのは1回である。

3. 2. 反復的音型

実際の楽曲においては、親指のくぐらせまたは親指からのまたぎを伴わない、一定のアルペジオ音型の反復形が頻繁に用いられる。次のようなものである。



これらの運指で大事なものは、右手なら3指と4指、左手なら4指と3指の使い分けである。例えば以下のような音型なら、音程の間隔に合わせ、このように弾き分けると最も演奏しやすくなる。



また、こういった音形は、親指のくぐらせまたは親指からのまたぎをせずに、つまり、手のポジションを移動させずに弾ける点が最大のメリットになるので、黒鍵に小指や親指が来ても一向差し支えない。例えば以下のようなパッセージである。



3. 3. 反復的音型の組み合わせ

例えば左手で次のようなパッセージを弾く時、どのように運指を考えればいだろうか。



ミ・ラ・ドの部分だけを見れば、ここに5・2・1を充てるのが最も普通で弾きやすいだろうが、このようなケースで重要なのは前後の音形との関係である。ミ・ラ・ドの前にはド・ラ・ドという音形があり、これは5・2・1という運指以外に選びようがないが、とするとそれに対してミ・ラ・ドをどうしたらよいか。そう考えると以下の運指が導き出されよう。



この運指を選ぶことによって、無用に手を広げたり縮めたりする動作をせずにすむようになるわけである。



《Chopin : Impromptu No.1》



《Haydn : Klaviersonate C-dur》

以上の例でも分かるように、これは別の言い方をすれば、前後の音形との相対的な音程関係を常に考慮し、手の形の変更等を最小限にとどめるということである。

以下のようなパッセージを例に取れば、「6度」と「5度」の音程の違いから譜例のように「5指」と「4指」を使い分ける運指により、はるかにミスをしにくく安定感のある演奏ができる。



3. 4. その他のバリエーション

①手を縮めることによる音形の接続

以下のようなパッセージが出て来ることがある。



これは、5指や4指から1指に、その逆に1指から5指や4指に、手を縮めることにより音形を接続していく運指である。親指をくぐらせたりまたぐ運指より、ソフトなポジションチェンジによる接続法と言える。以下のような音形もその一例である。



②幅広いアルペジオ

ロマン派以降の楽曲においては、以下のような非常に幅広い（音程間隔が広い）形のアルペジオが出て来ることが珍しくない。



開離形アルペジオと呼ばれるものだが、これに対しては、そのパッセージの速さ等にもよるものの、できるだけ手を広げて、親指をくぐらせたりまたぐ回数を少なくするのが良い。



《Rachmaninov : Elegie, Op.3 No.1》

4. 和音における運指法

4. 1. 3 和音や 7 の和音等

音程が1オクターブ以内である上記のような和音の場合、次に示すような運指が一般的であろう。



例 ハ音上のいくつかの種類の3和音等
(注：臨時記号は1小節間有効とする)

ただし、前後の音形との関係で必要な場合には、柔軟に対応しなければならない。例えば、右手の C・Fis・A の和音は上記の例の通りそれだけであれば 1・3・5 で弾くが、次のようなパッセージだったとしたら、まるで変わってきってしまうのである。



以下の右手パッセージは和音の連続であるが、3・4・5指を巧みに交代させる運指により、機動性と正確性を生み出している。



《Beethoven : Klaviersonate Es-dur》

4. 2. オクターブの音程を持つ和音

3和音等の最低音を1オクターブ上に重ねる次のような形の和音（最低音と最高音とが1オクターブを成す和音）は、ピアノ奏法では非常にしばしば用いられる中心的音形である。



この種の和音では、他に選択肢がないため黒鍵でも親指・小指を遠慮なく使用して良い。そして、3. 2. のアルペジオの項で述べたのと同様に、3 指と 4 指を和音の形（音程間隔）に合わせて使い分けるのが、運指の重要なポイントである。以下に、嬰へ音上のいくつかの形の和音およびその運指を挙げておく。



(注：臨時記号は 1 小節有効とする)

薬指は弱く動かしづらい指であるため、人は無意識的にせよ使うのを避け、和音の場合、全てを1・2・3・5の運指で弾いてしまうような傾向が見受けられる。4指が活用できる形の和音ではないのか、常に留意して欲しい。運指法において最重要なのは、全ての指を合理的に使い分けることと自然な手の形をなるべく崩さないことだからである。

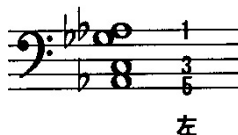
4. 3. 親指で2音を押さえる

そう頻繁に出て来るわけではないが、親指1本で2つの音を弾く次のような運指がある。



鍵盤と鍵盤のちょうど間に親指を寝かせるように置いて、隣り合う2音を同時に鳴らす奏法・運指である。

手が小さかったりすると困難ではあるが、隣り合う黒鍵の場合でも同様の運指が用いられることがある。

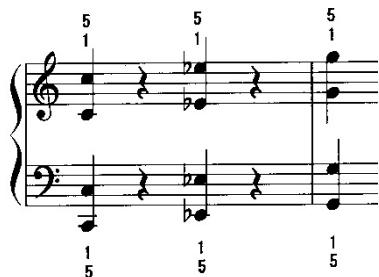


5. オクターブにおける運指法

オクターブ奏法においては、右手下声部および左手下声部の音は常に親指で演奏することになる。

ここまでは良いが、反対側の右手下声部および左手下声部の運指法が問題であり、手の大きさや柔軟性等の個人差の影響を最も受けやすいジャンルである。従って一般論を述べるのが難しいカテゴリーなのだが、敢えてごく標準的な日本人の体格等をイメージするとすれば（それとて男女差もあり、非常に曖昧ではあるが..）、以下の2点が原則になると思われる。

- ① 前後のパッセージの影響を受けずに弾けるオクターブについては、白鍵・黒鍵に関わらず5指で弾く。

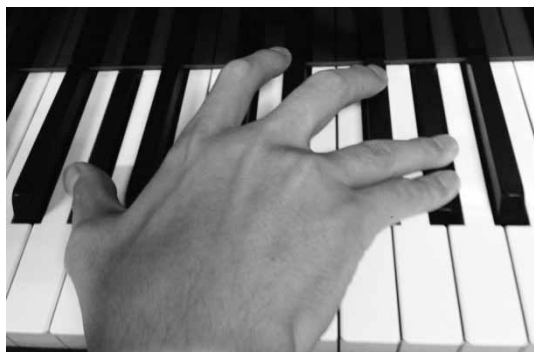


- ② オクターブの連続等のパッセージにおいては、白鍵は5指で、黒鍵は可能であれば4指で弾くようにする。



《Beethoven : Klaviersonate Es-dur》

もちろんあくまで原則であり、①における黒鍵オクターブでも、手の特徴から4指で弾いた方がより安定するという人もいるし、ちなみに筆者は5指と4指を合わせ2本の指で弾く形で、これを演奏する。



手の大きさや広がりには余裕がある人であれば、②におけるパッセージで特にそうだが、黒鍵に4指だけでなく3指を、白鍵にも4指（時には3指）を用いるようにすると、とてもスムーズなオクターブ演奏が可能になるであろう。



《Beethoven : Klaviersonate B-dur》

6. 重音における運指法

ここでの重音とは音2つの重なりのことを言い、重音どうしが連続するパッセージにおける運指法について述べる。実際に出て来るそのようなパッセージのほとんど大半は、3度音程または6度音程によるものである。

6. 1. 3度のパッセージ

基本は、隣接する3度音程どうしを弾く形であり、それらなるべく繋がるように運指を行う。



隣接する3度音程の弾きやすい運指としては、以下のものが挙げられる。黒鍵なのか白鍵なのかによってフィットする運指が変わってくるので、個々のケースで検討が必要である。



それが音階状に連続して行くと次のようなパッセージになるが（3度による音階）、重音においても指をくぐらせたりまたぐ運指を使用して、出来るだけスムーズに接続されるようにする。



楽曲においてはこのような音階そのものの形はあまり多くは出て来ないが、メロディを3度音程

で強化する形でパッセージ等で頻繁に現れる。

6. 2. 6度のパッセージ

3度と同様隣接する6度音程が繋がるように、原則以下の運指を用いる。



6度による音階が作られる場合は、またいで／くぐらせて、この運指を繰り返していけば良い。



ただし、以下の6度による半音階のような、白鍵と黒鍵が入り乱れる複雑なパッセージの場合は、下声部（右手の場合；左手ならば上声部）に親指を連続して用いることがある。



《Chopin : Etude, Op.25 No.8》

この場合、オクターブの項の②で述べたのと同じやり方で、反対側の声部には3指・4指・5指を使用することになる。

7. その他いくつかの運指技術について

7. 1. 指の持ち替え

ある音において、音を出さずに指を替えることを指の持ち替えと言う。



その音を弾いた状態で、手のポジションを移動することができ、次の音形に切らずに繋げることができるので、必要な場面でとても便利な運指である。特に、3指や4指から小指に、また2指や3指から親指への持ち替えは良く利用され、重宝される。

7. 2. 指のスライド

黒鍵から隣接する白鍵に、同じ指を滑らせて(上に上げずに)打鍵する運指が指のスライドである。



これに最も適した指は親指であるため、5.の②のオクターブのパッセージや6. 1. の6度のパッセージ等における親指の部分で多く用いられるが、小指でも使われるし、重音パッセージでは2指をスライドさせると弾きやすいことも多い。

7. 3. 運動性を高める運指

基礎的な運指法は、打鍵の正確性やまた分かりやすさに重点を置いた性格が強いが、逆にスピードや運動性に焦点を当てた運指法があり得る。

例えば、いわゆるトリルと呼ばれる2音の急速な反復音形だが、通常は2・3あるいは1・3または2・4の反復という運指を用いるものの、1・3・1・2 — 1・3・1・2 ... (あるいは1・3・2・3 — 1・3・2・3 ...) という運指を使うことにより、より高い運動性(力強さ、疲れにくさ、コントロールのしやすさ等)が得られたりする¹。

1. 3. で述べた同音連打では、敢えて2・2・2・2等の同じ指の連続で弾き、強靱な打鍵や音の均質さ等を生み出すケースもあり得る。

ただし、このあたりのどのような運指が運動性を高めるのかという問題には個人差がかなりあるのも事実で、目的にかなった運指を一人一人が見つけていく研究が大事であろう。

7. 4. ふさわしい音色や表現を求めて

ベートーヴェンのテンペスト・ソナタ、第1楽章展開部に次のパッセージがあるが、ここでは運指をどうしたらよいだろうか。

¹ これは、「同じ指を使い過ぎない」ということである。さまざまなパッセージや音形における一般原則として、特に事情がない限りは、なるべく特定の指に負担が集中しないように留意するのが良い。異なる指(異なる筋肉)を使用した方が、フレッシュな状態で弾くことができ、より良い運動性を発揮することができるのは自明だからである。



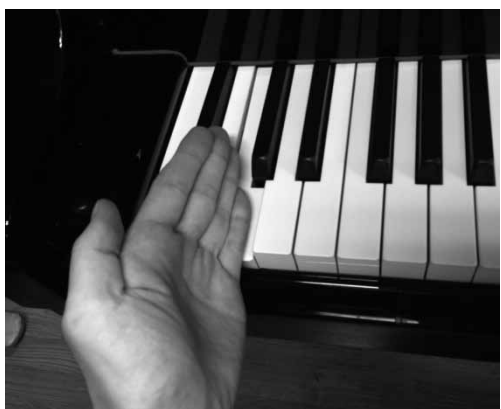
普通に考えれば、3. 2. で述べた通り「5・4・2・1」である。これ自体には何の問題もない。

しかし、この箇所における嵐が荒れ狂うような激しさ、強烈なフォルティッシモを表現するのに、この運指は果たして最適であろうか？この中でも一番大切な音だと思われる最初の2分音符を、最も弱い指である小指で弾かなければならないのはどうなのか。このように考えた時、重要な音に強い指（しばしば中指や親指、場合によって2指3指を合わせて弾いたりすることもある）を使うことを躊躇すべきでない。



弱音や柔らかい音の場面であっても、深く美しい音色を出すために、強い指は有効である。例えば、メロディの開始音を3指で弾き始める（その後必要に応じて他の指に持ち替える）運指法は、非常にしばしば用いられる。

特に低音部の白鍵で使われるやり方だが、手のひらを平らにして、小指側を強烈に叩きつける場合もある。曲の最後の音などで効果的に用いられることがある。



むすびに

本稿は基本概論ということで、全般的な運指法の諸項目について、基礎・入門的な解説を行いまとめることを目的とした。従って必要最小限の内

容にしか触れられていない懸念はあり、実際の作品においてはまだまだ多くの検討材料が残されているものの、運指法理解への一助となれば幸いである。